熊大教育実践研究　第17号，61－69，2000

熊本大学における「フレンドシップ事業」の実践（第2報）

大　迫　靖　雄*　・木　原　信　市**
吉　田　道　雄***・中　山　玄　三***

The Implementation of "Friendship Project" at Kumamoto University (II)

Yasuo OHSAKO, Shinichi KIHARA, Michio YOSHIDA, Genzo NAKAYAMA

Ⅰ．フレンドシップ事業の企画

フレンドシップ事業は，教員の養成段階において，学生が種々の体験活動等を通して，子どもたちとふれあい，子どもの気持ちや行動を理解し，実践的指導力の基礎を身につけることができるような機会を設けることをねらいとして，平成9年度から新たにスタートした単年度予算によるパイロット事業である．熊本大学では，平成9年度に引き続き平成10年度においても，教育学部附属教育実践研究指導センターが，企画を進められることになった．本年度は，熊本県教育庁社会教育課，熊本県立天草青年の家，熊本県産山村企画観光課，熊本県天草郡大矢野町教育委員会，大矢野町立上北小学校，教育学部附属小・中学校に，学内外の協力・連携機関として参画いただいた．

プログラムの内容を決定するに当たっては，平成9年度の実績をもとに検討した結果，本年度は，教育学部理科教育教官が主催する「青少年のための科学の祭典」と相互に乗り入れた授業を，新たに加えることにした．授業は，教育学部の2年次～4年次学生を対象とした「教育実践研究指導法演習」の名称のもとで，教員免許状取得のための単位にはならない自由選択科目として開設した．主な内容は，資料1のシラバスに示したように，①酪農体験を通した附属中学校生徒とのふれあい，②学校・家庭・地域の連携行事「上北祭り」への参加，③天草青年の家主催行事「秋だ！アドベンチャー」への参加，④「青少年のための科学の祭典」への参加へ，⑤コンピュータ活用を通した附属小学校児童とのふれあいの5つの体験的活動と，⑥社会教育における今日的課題についての講演から，授業を構成した．

定員を30名に限り受講生を募集したところ，3年次生を中心に合計28名から受講届けが出された．受講生の内訳は4年次生5名，3年次生21名，2年次生2名で，このうち女子が23名で全体の82%を占めた．

本報告では，上述したような，熊本大学における平成10年度フレンドシップ事業の実施とその成果について述べてみたい．

Ⅱ．フレンドシップ事業の実践

第1講「酪農体験を通した附属中学校生徒とのふれあい」

(1)　授業実施要項

月日：10月24日（土）
場所：うぶやま観光牧場
日程：8：15　附属中学校玄関前集合
　8：30　出発
　10：00　うぶやま牧場着
　10：00～15：00　乳搾り，乳製品づくり，牛舎等の見学など
　15：00　うぶやま牧場発
　16：30　附属中学校着・解散
人数：附属中学校第3学年生徒　22名
　教育学部学生　20名
　引率教官　3名

(2)　参加学生の体験的学習レポート

今回，初めて牧場に行って酪農体験を行ったのですが，私にとってすべての出来事が初体験のことばかりだったので，とてもいい経験ができました．私は小学校主専なので，附属中学校には観察実習で1度しか行ったことがないので，中学生とうまくやっていけるだろうかととても不安でした．しかし実際に中学生のC班と一緒に活動していく中で，少しず

---

* 教育学部長
** 前教育実践研究指導センター長
*** 教育実践研究指導センター

資料1

平成10年度フレンドシップ事業・授業シラバス

授業科目：　自由選択科目「教育実践研究指導法演習」
開講年次：　教育学部2・3・4年次　定員30名
学　　期：　後期
曜　　日：　土・日曜日
単　　位：　2単位
授業形態：　体験的学習
授業の概要：　種々の体験活動等を通して，子どもたちと触れ合い，子どもの気持ちや行動を理解し，教員としての実践的指導力の基礎を身につけることができるような機会を提供する．

(1)　酪農体験を通した附属中学校生徒とのふれあい
　日時：10月24日（土）8時30分～16時30分
　場所：うぶやま牧場
　担当：岩下徳行（産山村役場）
　　　　西澤悦子・上妻昭仁（附属中）中山玄三（実践センター）
(2)　学校・家庭・地域の連携行事への参加　－第2回上北祭り－
　日時：11月8日（日）8時～19時
　場所：天草郡大矢野町立上北小学校
　担当：佐々木洋助（上北小）中山玄三（実践センター）
(3)　集団活動の体験と集団運営技法・ヒューマンスキルの習得
　日時：11月14日（土）8時～15日（日）16時
　場所：熊本県立天草青年の家
　担当：佐藤信衛（天草青年の家）吉田道雄（実践センター）
(4)　青少年のための科学の祭典への参加
　日時：11月28日（土）・29日（日）10時～17時
　場所：グランメッセ熊本
　担当：佐藤成哉（教育学部理科）吉田道雄（実践センター）
(5)　コンピュータ活用を通した附属小学校児童とのふれあい
　日時：12月5日（土）8時30分～11時30分
　場所：附属教育実践研究指導センター
　担当：前田康裕（附属小）中山玄三（実践センター）
(6)　フレンドシップ事業シンポジウム
　特別講演　熊本県社会教育課課長　長谷川和弘
　日時：3月4日（木）14時～17時20分
　場所：くすの木会館

テキスト：　使用せず．
評価方法：　出席とレポートをもとに評価する．
備　　考：　連絡事項については，随時必要に応じて掲示もしくは電話連絡する．

つうちとけていけているということが実感され，私も中学生に戻ったような気持ちで一緒に楽しく活動できたということが，とても嬉しかったです．中学校主専の友達から中学生とうちとけるのに時間がかかったと聞いていたのですが，今回は教育実習での先生と生徒という立場を離れてお互いに知っている

ことを教えあったり，知らないことを一緒に学んでいったので，短時間でうちとけることができたのだと思います．今回の活動の中で特に印象に残ったのは牛舎等の見学や乳搾りでした．乳搾りの時，恐る恐る手を出して牛の乳を握ろうとした時，牛が足を動かしたので，私の気持ちが伝わったのかなぁと思いました．牛舎の見学は，ちょうど，牛舎の掃除をしているところだったので，最初は臭いなぁと思ったのですが，こういう風に掃除をして，牛を清潔にしているから，私達は毎日おいしい牛乳が飲めるので，感謝しなければならないなぁと思いました．昔は手作業だった牛舎も今はトラクターという機械を使っての作業だったので便利になったなぁと思いました．今回の体験は実際に参加してみないと得られないものばかりだったので，参加してみて良かったなぁと思いました．（清水美紀）

第２講「学校・家庭・地域の連携行事への参加ー上北祭りー」

(1) 授業実施要項

月日：11月８日（日）

場所：天草郡大矢野町立上北小学校

日程：7：45　熊本大学教養部前集合
　8：00　出発
　9：45　上北小学校着
　10：00～17：00　地区住民によるバザー，餅つき，唐芋掘り，地区シンポジウムなど
　17：15　上北小学校発
　19：00　熊本大学着・解散

人数：教育学部学生　24名
　引率教官　1名

(2) 参加学生の体験的学習レポート

上北小学校で一日を過ごし，なぜだか帰るのがとても寂しく感じられました．それほどに，今日のふれあいはあったかいものでした．

海に面した地域の家庭は，独特の文化や考えをもっていると，以前耳にしたことがあり，今回のこの訪問はとても楽しみにしていました．そういう思いの中で聞いた“群読”には，とても心を打たされました．子ども達の海への思いはもちろんのこと，海を相手に仕事をしている親への子ども達の思いは，切ないほどに深いんだなあとしみじみと考えました．群読の中で子ども達が「お父さんが無事に漁から帰ってくるとほっとします.」と言いました．自分は今まで，親が仕事から帰ってきたからといって，それはあたりまえのことで，ほっとするなんていう感情は抱いたことはありません．完全に負けでした．自分の方が何年も長いこと生きてきているのに，上北小の子ども達の方が何倍も人の命の尊さ，生きていることのすばらしさを知っていました．そして，そのことを自然と学んでいることがうらやましくも思えました．

上北まつりを通じて思ったことに，小学校が成し得る，地域での存在があります．上北まつりでは，小学校がまさに中心となって，地域を結びつけていました．まつりが行われることで，また，人と人とのふれあう場所を提供しています．お年寄りから赤ちゃんまで集まる，これからの学校の大きな役割を見せられたように感じました．

小学校とふれあう中で，ある子から「なんで先生になりたいの.」と，唐突に聞かれました．あたりまえの質問であるのに，子ども達から直接に問われると，戸惑いは隠せませんでした．「子どもが好きだからかなぁ.」とあいまいに答えると，「だったら，幼稚園の先生でもいいでしょ.」と厳しくやられました．まだまだ未熟な自分に思わぬところで目を向けさせられ負けたという気持ちとともに，ありがとうという思いでいっぱいです．

人は人から学んでいくという校長先生のお言葉を噛み締め，今日のような小学校生活を送りたいという意思を改められた一日でした．（百原　雅）

第３講「天草青年の家主催行事　秋だ！アドベンチャー」

(1) 授業実施要項

月日：11月14日（土）～15日（日）

場所：熊本県立天草青年の家

日程：

11月14日（土）　8：00　熊本大学教養部前集合
　10：00　天草青年の家受付開始
　11：00　開会行事
　11：40　昼食（持参弁当）
　12：30　科学に挑戦　ワクワク科学実験教室
　17：00　夕食・自由
　19：00　スターウォッチング
　21：00　入浴
　22：00　就寝

11月15日（日）　7：00　起床・洗面・朝食
　9：00　植物探検《選択プログラ

ム》
A やまいもの採取
B いもほり体験・
焼きいも
C 野外ゲーム
D 焼き杉工作（別に100円の材料代が必要）

12：30　昼食
13：00　閉会行事
14：00　出発
16：00　熊本大学教養部前到着

人 数：教育学部学生11名予定
公立小学校4～6年生50名
引率教官1名

(2) 参加学生の体験的学習レポート

今，私の手元に今回の写真がある．再び大学へ戻って振り返ると夢のように過ぎていった一泊二日間だった．子どもにこちらで選んだ写真を焼増して送るが，「写真，着いたよ．」と返事が来るのを楽しみに待っている．

今回のテーマの「集団活動の体験と集団運営技法・ヒューマンスキルの習得」から私がイメージしたのは，教育実習の時の吉田先生によるワークショップのような，講義と演習が中心の理論的・体系的に学ぶ大学生だけの宿泊訓練なんだろうと思っていたら，全く違っていた．会場の天草青年の家主催による「秋だ！アドベンチャー」という行事に小学生と共に参加するということを私は天草へ向かうバスの中で初めて知らされた．小学生の頃，キャンプに行ったときに，班には必ず一人，お兄さんかお姉さんがリーダーとしていらっしゃったが，今度は自分がそのリーダー役になるのかと，理解した．

今回は青年の家の主催事業として開かれるのだが，主催者側はこの野外活動体験で子どもたちに何を学んで欲しいのだろうか．そのためには私たちがどういう関わり方を持てばよいのだろうか？所長の佐藤先生は学生への挨拶の中で「成功が自信となり，生きる力につながる」と言われた．そのためには今回の行事の中で子どもに成就感を与えること，崩した言い方をすれば，何よりも「楽しかった」と思わせることであろう．また，「子どもたちをリードすると共に『ガキ大将』として接して欲しい」とも言われた．職員の金子先生は「身構えずにまとめるべきときまとめる．時間を守らせる．子どもたち自身にさせる.」と，生活指導を含め，子どもたちとどう関わるかについてお話しされた．こういう話が「先生」としてどうあればよいのか，自分にとってはとても勉強になる．

県内から集まった初対面の子どもたち．私は別れる時迄にはこの偶然出会った十名の仲間がかけがえのない友達のように仲良くなってほしいとの願いの下，班を運営したいと考えた．

出会って早速，小五の女の子が私の胸に飛び込んできた．こういう子どもはすぐに仲良くなりやすいが，恥ずかしがりやで自分からは中々先生のほうに寄ってはこない子どももいる．なつく子どもが一緒にいると私もそちらの方に気が向きがちだ．それでは他の子どもがどういう気持ちでいるのか，体で発している信号を感じなければならない．今回は子どもと目を合わせたら，自分の鼻を膨らませて相手を笑わせたりして，そのような子どもも自然となついて来た．

まず，一日目の昼食時から積極的に話しかけた．少しでも早く班としての纏まりをつくりたく思った．当初参加者名簿に載っていた六年生が二人も参加出来なくなり，六年生は男子一名であった．その彼を班長として扱おうと思っていたのだが，他の班の同じ学校出身の友達の方にいってしまった．最初はこちらが話しかけても，表情が硬く，中々うちとけなかった．同じ小学校の児童どうしなど，知っている仲間でグループを作りがちであった．無理せずに仲間づくりを自然にやればいいかなと思って焦らずにいこうと思った．

青年の家の先生方の話・指導には，いつの間にかひきこまれ，楽しませて下さる．さすがプロだと思わされた．先生方のご指導の姿は大変勉強になった．ただ，全体での仲間づくりは人数が多すぎてとても覚えきれるものではない．その点，班での仲間づくりの時間を与えてもらえればよかったのではないかと思う．

科学実験教室では先生の説明に目を輝かせて聞き入る子どもたちが大変印象に残った．子どもたちと共にシャボン玉をつくるための輪を作ったり，スライムでは混ぜながら液を入れなければならないので協力しながら楽しくやれた．なかなかうまく紙のブーメランが飛ばなかったり，大きなシャボン玉ができずに割れてしまった．どうすればうまく作れるのか予備実験や，なぜそうなるのかの科学的説明・指導が出来れば，なおよかったと思う．そして，うまく出来た人が，まだ出来ない人に説明をする，こ

のような営みの中で子どもたちどうしの絆が生まれてくるのではないだろうか．個人的反省としては，写真記録のほうに少し力が入りすぎてしまった．このような場では自分の作品はつくらずに子どもたちの作品づくりを巡視し，援助をするというのが一番良かったのではないだろうか．

食事では班の全員がそろうまで待ったり，食べる時の行儀，食べるのが遅い子どもが食べ終わるまでどうするか，後片付けはどうかという点で留意した．子どもたちはバイキング方式で適当な量を取っており，食べ残しはあまり目立たなかったようだ．

スターウォッチングでは資料やビデオを使って，宇宙への興味をかきたてられるところが良かった．松島町はまだ明るくて，満天の星空とまではいかなかったが，それでも熊本市内よりは星が多いようだ．駐車場にブルーシートを敷き，その上で毛布にくるまって夜空を見上げるようなことは初めてで，普段じっくりと夜空を眺めたことのない私はワクワクしてきた．流れ星が出る度に歓声があがり，「どこに出た？」「あれが天の川？」「あれは何座？」などと話しあいながら，共に流星を今か今かと待つのは大変楽しかった．

一日の終わり位になってから，漸くおとなしい子どものほうからも話しかけてきて，談話室でオセロや将棋などのゲームをして楽しんだ．子ども相手とはいえ，勝つのはやはり気持ちがいい．

就寝指導は一番気になったことの一つだが，「眠くないよ」と言う子どもたちに「とにかく布団の中に入って目を閉じなさい.」と言ったら，特に問題なく眠っていた．

翌日は午前中，野外ゲームが主な行事でもう解散である．折角，仲が良くなりかけている子どもたちとあと僅かで別れなければならないのは残念であるが，仕方がない．

私が野外ゲームの班になるようにお願いしたのは，ゲームにどのようなものがあるのか全く知らず，それを学びたかったからである．藤野先生の用意されたプログラムは私の期待を満足させるものであった．どの先生もそうだが，大変語りがうまく，子どもの操縦も思いのままである．子どもの心を持ちつつ，指導されておられる．いつの間にか自然に親しませることの出来るゲームの数々にうなされるものがあった．

全体を通して自己評価をしてみて生活指導の面ではうまくいき，子どもたちと私のつながりは出来たけれども，子どもたちどうしのつながりはまだまだだった．班全体で一緒に一つのものに取り組むといったような行事が少なく，同じ学校の子どもどうしでの行事が多かったようだ．

天草青年の家発行の『所長室便り　千嚴萬感』を少し読んだが，佐藤先生のお話しやお考えも伺うことが出来，今後，自分がどのように野外活動で教育を行うかという上で大変勉強になった．

あと一日でもあれば，子どもたちとの絆がもっと深まったのにと思うと残念である．また，こういう機会があれば，是非また研鑽を積ませて頂きたいと思う．

有難うございました．　　　　　（上甲能也）

第4講「青少年のための科学の祭典への参加」

(1)　授業実施要項

月日：11月28日（土）～29日（日）

場所：グランメッセ熊本

日程：

11月28日（土）	8：30	熊本大学教養部前集合
	10：00	開会　科学の祭典への参加
	17：00	閉会　グランメッセ熊本出発
	18：00	熊本大学教養部到着，解散
11月29日（日）	8：30	熊本大学教養部前集合
	10：00	開会　科学の祭典への参加
	17：00	閉会　グランメッセ熊本出発
	18：00	熊本大学教養部到着，解散

人数：教育学部学生15名
　　　引率教官2名

(2)　参加学生の体験的学習レポート

今回この科学の祭典に参加して，規模の大きさに驚きました．各ブースごとによく考えてあり，なるほど，と思える出展ばかりでした．入場者数もものすごく多くて，先生方も，私たちも，うれしい悲鳴がでるほどでした．

私は“プチロケットを飛ばそう”というブースのお手伝いをしたのですが，次々にくる子ども達と接して，子どもは想像力豊かだな，とつくづく思いました．

ロケットを作るのに，男の子などは，すごくこっ

た型を真剣な顔つきで作っています．“うわぁ，かっこいいねぇ，すごいね”と声をかけると，にこっとはにかみながら，とてもほこらしげに作業を続けていきました．ロケットをとばすところでは，ひもの引き方にちょっとしたコツが必要で，私が何回か体験してつかんだコツを，なかなか飛ばずに，もう楽しくないなぁというような顔をしている子どもに，こうするんだよ，と教えると，初めのうちはうまくいかないのですが，だんだんと顔が明るくなってきました．教えた私も，その子がうまくなると，とてもうれしい気持ちになりました．今回学んだのは，ちょっとした言葉かけが，子どもに大きな影響を与えるのだ，ということです．私もそうだったように，自分をよく見ていてくれる，声をかけてくれるということは，とても安心感を得ることができます．今回，さらにそれがよく見てとれました．

参加して，人が多くて忙しくて大変でしたが，とてもよい経験になりました．　（高光真理子）

第5講「コンピュータ活用を通した附属小学校児童とのふれあい」

(1)　授業実施要項

月日：12月5日（土）

場所：附属小学校・視聴覚教室

日程：8：30　附属小学校玄関前集合

8：45～9：30　事前講習会：ホームページの作成方法と児童作品

9：40～10:25　附属小学校児童によるプレゼンテーションと教育学部学生からの品評

10：40～11:25　グループ別にホームページの修正・改善と全体での交流

11：30　解散

人数：附属小学校4年2組児童　40名

教育学部学生　18名

(2)　参加学生の体験的学習レポート

今日は，教育実習とは，全く逆のことを行った．教育実習では，自分達が子供達に授業を行ったが，今日は小学校4年生の発表を見た．

生徒達が班ごとにパソコンを使い，ペットボトルや衣服のリサイクルなどについて調べており，私自身も，初めて学ぶこともあり，勉強になった．また，驚いたことに，調査をすすめる上で，業者に直接連絡をし，答えを得ている子がいた．私達，大学生でも，なかなか行動にうつせない様な事を，生徒が，自主的に行っているのは，本当にすごいことだと思う．本当に知りたいどいう気持ちがあるからこそ，行動にもうつせたのだと思った．

また，パソコンの使い方が，自分よりも達者であることを知り，このままではいけないなと思った．生徒達ができることを，教師になろうとする私ができないのは，問題があると思ったからだ．少しずつでも，やっていきたい．私は5班の子と一緒に過ごしたが，班長さんの言うことを，なかなかみんな，聞こうとせずに，正直いって，どう対応していいか悩んだ．みんなで協力してやるべき時に，ふざけている男の子がいて，困った．

教師となった時に，こういう子供達をどうやって授業に，取り組ませるべきかと，ふと考えた．今の私には，うまく取り組ませることが，できなかった．

将来，小学校の教師を希望しているので，表面的な勉強だけでなく，これから先も，積極的に子供達と接していきたいと思う．

今日は，小学4年生の実態を少しだけ知った様な気がした．

小学生をまとめることは，非常に難しいと実感できただけでも，今日行った，意味があったと思う．

（東　千夏）

Ⅲ．フレンドシップ事業の成果のまとめ

平成10年度フレンドシップ事業の実践報告，成果のまとめと課題についての協議を行うために，5大学連絡協議会，公開シンポジウムおよび事後企画運営協議会を，平成11年3月4日（木）に熊本大学内くすの木会館にて開催した．

5大学連絡協議会では，本年度フレンドシップ事業を実施した宇都宮大学，広島大学，長崎大学，宮崎大学，福岡教育大学から各1名ご参加いただき，それぞれの大学での事業実践の報告と課題について情報を交換した．フレンドシップ事業の実施方式・形態という点では，①実践センターが企画・運営するところ（広島大学，宮崎大学，熊本大学），②毎年希望学科を募るプロジェクト方式で実施するところ（福岡教育大学），③学部教職専門科目の授業の一貫として実施するところ（宇都宮大学），④教育実習全体の中に野外体験学習として位置づけて実施するところ（長崎大学）など，各大学によって独自性が見られた．また，①もしくは②の方式で実施する場合は「選択科目」として，③もしくは④の方式で実施する場合は「必修科目」として，授業が開設

されていた．他方，土・日曜のスケジュール，学生によるプログラム作り，男子受講生が少ないこと，宿泊費等の学生負担などの問題が，事業担当教官の間で共通の話題となった．

公開シンポジウムでは，まず，熊本県教育庁社会教育課の長谷川和弘課長に，「社会教育における今日的課題」についての特別講演を行っていただいた．続くパネル討論では，受講した学生を交え，学内外の協力・連携機関の関係者6名が討論者，同事業を実施している5大学の教授ら6名がコメンテーターを務め，「フレンドシップ事業を通した教員養成の課題」について話し合った．学生からは，子供とのふれあい体験を通して自らが感じ取った多くの貴重な知的な気づきが報告された．討論者からは，教師になる前に，体験を通して人とふれあい学ぶことや，学生自らが積極的に働きかけ行動すること，豊かな体験に裏付けられた感性を備えておくこと，学生が企画，立案，実施，評価する主体となることなどの大切さが指摘された．コメンテーターからは，体験したことをその場限りの体験だけに留めることなく，それを大学での学びに返し，どう今後に生かしていくかが課題であるとアドバイスいただいた．

事後企画運営協議会では，平成10年度フレンドシップ事業の総括が行なわれ，次年度に向けた継続的な取り組みが必要であるとのコンセンサスが得られた．

Ⅳ．フレンドシップ事業の評価

平成10年度フレンドシップ事業の評価に当たっては，事業の実施主体である教育実践研究指導センターの自画自賛，自己満足に始終しないためにも，受講生による評価と学内外の協力・連携機関の関係者による評価に加え，同事業を実施している他大学の関係者（第三者）による評価も併せて大切にした点が特色であった．ここでは，紙面の都合上，熊本県教育長社会教育課長の長谷川和弘氏によるコメントを次に掲載することに留める．

フレンドシップ事業の意義

本年度も，昨年度に引き続き，県立天草青年の家とともに，県の社会教育行政の立場から，企画当初より，本事業に参画させていただいてました．事業の締めくくりに開かれた公開シンポジウムでの関係者のコメントを念頭に置きながら，簡単に振り返ってみたい．

本事業の一番の意義は，子どもたちと様々な形で触れ合う機会を通じて，教員を目指す学生の視野を広げる契機となるところにあったと思う．特に，次の2点を挙げたい．1つは，5カ所での活動を通じて，学生は，子どもたちにはさまざまな面があることに気がつけたということである．シンポジウムで，教育実習では子どもを上手に扱うのは難しいと思っていたが，本事業の中では，子どもの中にスムーズに入って行けた，という，学生の感想があった．将来，多くの角度から子どもに接し，自分なりの子どもへの接し方や子どもの良さを発見できるようになっていってほしい．

2つめは，青少年教育施設，学校・家庭・地域社会の連携事業，地域おこしの拠点，科学の祭典等，多様な学校外での活動への参加が組まれたことである．

従来からの教員養成カリキュラムの中では，そういう機会はない．しかし，学校教育を進めていく上では，教職員も，学校内で頑張っていくだけでなく，自分自身が，学校外にも目を向け，地域社会の中に入り，地域の方々の理解を得る努力をすることが非常に大切である．また，地域の教育力を学校教育の中にもうまく取り組んで，学校教育の効果を上げることも可能になっていく．学生を受け入れた施設・学校等の方々も，学校と家庭・地域社会の連携・融合が大切であると，異口同音に述べておられた．そういう考えがあったこともあると思うが，これらの方々は，本事業に対し，好意的な反応であった．

本事業は，学内関係者だけで実施できるものではなく，関係行政機関，施設，地域の方々等多くの人々の協力があって成り立つものである．その意味で，本事業を準備・実施された，熊本大学教育学部の皆様の御苦労は大きかったと思う．皆様の御努力に敬意を表するとともに，斬新な内容の本事業がますます発展することをお祈りしたい．もちろん，県教育委員会としても，より資質の高い教員が一人でも多く育成されるよう，今後ともできるだけのお手伝いをさせていただきたいと考えている．

（長谷川和弘）

Ⅴ．フレンドシップ事業の課題と展望

熊本大学で，平成10年度に実施したフレンドシップ事業を振り返り，その課題と展望について，7つの視点からまとめて述べてみたい．

(1) フレンドシップ事業の理念

フレンドシップ事業は，従来とは違う体験を重視した大学の授業として，子供と対話する力や子供を読み取る力などの実践的指導力の基盤となるような

資質を形成することをめざし，子供とふれあう機会や，地域の人々，教育に関わる人々とふれあう機会を提供するものである．それは，将来教員を志す学生を対象とした，教員養成課程と学校教育現場をつなぐためのものである．さらに，人づきあい一般の経験をするという意味では，ゼロ免課程の学生にも門戸を開き，その理念を閉じないことが肝要とされる．本事業は，社会教育施設員や土日スクール，ボランティア活動などのリーダー養成にも資する機会となりえるものと思われる．

(2) 学生による授業評価

学生による授業評価は，「きつかった，大変だった…．でも，やってみてよかった.」という感動，実感を伴った感想が多く寄せられ，学生の心の部分に迫るものであったことが，レポートから読み取れる．また，昨年度単位取得済みの学生（3名）が，今年度も引き続き参加したことからも，その主体的な学習態度がうかがえ，本授業に対する学生の評価は極めて高いものであった．総じて，教育実習以外の場で，子供とともに，体験を通した感動を共感し，感動の輪を広げる機会，豊かな感性を身につける機会となったことは，本事業が意図した趣旨に適うものであったと自評できる．しかし，2年次～4年次生の30名を定員としたこともあり，一部希望者，特に女子学生を対象とした授業であったことは拒めない．願わくば，本授業で得られた貴重な体験が，口込みで他の学生に伝わっていくような波及効果を期待するところである．

(3) 開かれた大学カリキュラム

フレンドシップ事業を進めるに当たっては，青少年科学の祭典や，青年自然の家主催行事，公立小学校と家庭・地域の連携行事などと，大学カリキュラムとの連携を図った相互乗り入れ型のプログラムを企画，実施した．地域のニーズに応じた開かれた大学として，大学と学内外の協力・連携機関とが，ともに主体となって取り組んだ．幸いにも，教育委員会，社会教育施設，公立学校，附属学校などの教育機関との連携が円滑に図られ，また，上北祭りではPTAを中心とした地区住民の方々のご協力も得られた．さらに，町や村おこし，地域振興の一助にもなった．本事業の実践を通して，このような新しい授業形態での教員養成カリキュラムが今後より一層重視されるよう，教育関係諸機関の多くの方々から強い要請があった．今後は，大学カリキュラムの開発・実施・評価を，地域社会とともに行っていけるような学社融合の体制づくりも必要ではなかろうか．

(4) 土・日曜日を中心としたスケジュール

大学の必修授業科目ならば平日に，また，他の専門授業科目とコマが重ならないようにという教務委員会からの要請と併せて，地域や社会教育施設の行事に参加するには，日程上，土・日曜日を中心としたスケジュールとならざるを得なかった．平成10年度は，11月前後に授業が集中したことや，就職説明会，学外での実習，集中講義などと一部重なったこともあり，最低授業出席回数を5回のうち3回以上を原則とした．このような状況のもとでも，受講生の間には積極的に参加する意思と主体的な態度が見られたことは，好ましい限りである．本事業が協力・連携機関主催の行事や活動と連動した日程となっていることから，日程変更が必ずしも容易ではなく，学部の授業や行事等との事前の日程調整の在り方が，課題として残された．今後は，2002年から完全実施される学校週5日制への対応として，大学が学校外での土日スクールへの橋渡しとなるよう，積極的に本事業を位置づける方向も考えられる．

(5) プログラムの企画・立案

これまで，教育実践研究指導センターと協力・連携機関が，相互乗り入れの形で，プログラムを企画し，実施してきた．平成10年度は，上北小学校の強い要請を受けて，受講生が企画した出し物を上北祭りで披露する機会を組み入れた．異なる専攻，異なる学年からなる受講生は，往路のバスの中で，約1時間30分という時間的制約の中で，自ら企画し，準備し，実行した．このように，学生が主体的に企画・立案し，実行するようなプログラム作りを，今後一層重視すべきであろう．受け身的な参加から主体的能動的な人とのかかわりを大切にすることが，ふれあいをテーマにした本事業を論旨通り実践するための鍵になると思う．さらに，学生も指導者となれるような場を作るためには，学生が事前に諸技能を身につけておく必要がある．これまでは，プログラムの1つ1つが，自己完結型のモジュールになっていたが，今後は，授業相互の結びつきや，体験的学習の順序性や階層性を一層明確にすること，また，さらに，本プログラムが，他の教職専門科目の学習と相互にフィードバックされることが望ましいと思われる．

(6) フレンドシップ事業の実施主体

平成10年度には，教育学部教官（理科教育）のご協力もあり，青少年科学の祭典と本事業をタイアップさせることができた．本事業の各々のプログラムの中に，大学教官の専門性を活かす機会を，必

要に応じて随時，組み込んでいくことが理想である．このように，本事業の運営・実施に寄与する体制として，学部全体で分担できるような方向を考えることも今後の検討課題となろう．これまで，定員30名の自由選択科目として開設してきたが，全員を対象とした必修科目とするのが望ましいかどうか，現在，学部の方で検討中である．また，フレンドシップ事業の実施主体を，教育実践研究指導センターに定着させるのも一つの方策ではあるが，実施希望学科等を毎年募ったプロジェクト方式や，学部全体の教育実習の一貫として位置づけるなど，学部との連携を図った方策も検討する余地が残されている．

(7) 予算措置の見通しとそれへの対応

熊本大学では，平成9・10年度の2年間，フレンドシップ事業の予算を文部省より配分され，事業の実施に当たってきた．事業開始当初より，単年度の予算措置によるパイロット事業としての性格をもつものであることは承知していたが，もし仮に，事業経費が2～3年で打ち切られた場合，その後，継続して事業を実施するためには，自助努力として，バス借上げ，協力・連携機関との打合せのための交通費・謝金，その他の消耗品などの費用をどのように捻出するかという問題がある．この点については，本事業の意義と価値を認めた上で，教育学部全体としての検討と具体的な対応策が待たれるところである．

最後に，このような新しい授業形態での教員養成カリキュラムが，今後より一層重視されるよう，教育関係諸機関から強い要請もあり，センターとしては，今後も継続して事業を展開していきたい．

参考文献

熊本大学教育学部附属教育実践研究指導センター　平成10年度熊本大学教育学部フレンドシップ事業実施・成果報告書　1999.